

「若手研究者支援 2 次募集」海外調査	
エドゥアール・マネ《オランピア》以後の黒人女性表象に関する作品調査	
氏名 木村 美由紀	比較社会文化学専攻 博士後期課程 1 年
期間	2026 年 2 月 16 日 ~ 2026 年 2 月 23 日
場所	アメリカ合衆国/ニューヨーク、ワシントン DC、バッファロー
施設	コロンビア大学、メトロポリタン美術館、ニューヨーク近代美術館、ワシントン・ナショナル・ギャラリー、バッファロー美術館

1. 海外調査の目的

本研究は、19 世紀後半に活躍したフランスの画家エドゥアール・マネ(Édouard Manet, 1832-1883)によって描かれ、西洋美術史のモダニズムにおける先駆的な作品として位置づけられている《オランピア》(1865)の黒人女性表象が後続する画家の作品に与えた影響を視覚的配置や意味作用の観点で考察することで、19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけてのフランス近代美術における黒人女性表象を、《オランピア》以後の系譜として再定位し、視覚表象・制度的文脈・受容史の三層を横断的に分析することを目的とする。

その方法論的基盤は、①作品の精緻な視覚分析、②同時代批評および展覧会史の検討、③アーカイブ資料の調査に置かれている。それらの手法を基礎としつつ、表象が成立する社会的・人種的背景にも注視しながらジェンダーおよびフェミニズムの視点を導入するものである。

ここでは、Denise Murrell による《オランピア》の再読および黒人モデルの可視化に関する先行研究を理論的基盤としている¹。

以上の点から、本研究は、刊行文献、アーカイブ資料、展覧会関連資料、電子リソースという複数の資料群を相互に参照しながら分析を進める必要がある。よって、今回の渡航調査では、日本から入手が難しい資料の調査、そして分析対象の作品を実見による図像解析を目的としている。

2. 得られた成果

2.1 ニューヨークにおける調査

コロンビア大学附属 Avery Architectural & Fine Arts Library においては、出国前の数か月に及び同館の研究サービス司書と連絡を取り、事前に案内を受けた指定検索サイトで同大学所蔵の重要文献や書籍、カタログ資料など日本国内では入手困難なものを多数確認し、現地ではゲストアクセス許可を得て当該資料の閲覧および、章単位での PDF 取得および規則に基づく範囲での複写を行った。

ニューヨーク近代美術館においては、分析対象作品であるパブロ・ピカソによる《アヴィニョンの娘たち》(1907)の実見と視覚分析を実施すると共に、同研究資料センターにおいては、展覧会ファイル、キュレーターによる未刊行資料、内部文書等の調査を実施した。これらの資料は、一般的な学術データベースには収録されておらず、作品解釈の変遷や制度的文脈を把握する上で不可欠な一次資料である。

メトロポリタン美術館においては、同館のキュレーターである Denise Murrell との面談が実現できた。本研究が依拠する研究者本人との学術対話の機会を得たことで、植民地主義的文脈と視覚表象の関係を再定義する理論的枠組みが一層明確となった。また、同氏の最新の研究動向を直接伺ったことで、研究に対する大いなる刺激と知見を得た。さらに、この機会を通じて個人的関係性を構築できたことにより、帰国後も同氏から研究に関連する貴重な資料や助言をメールで頂く等、互いのコンタクトを継続しており、同氏から「貴方が博士論文を提出するまでにあらゆる助言を継続させてほしい」というお言葉を頂いた。これらの成果は、博士論文に向けて極めて重要な基盤となる。

2.2 ワシントン D.C における調査

ワシントン・ナショナル・ギャラリーにおいて、分析対象となるフレデリック・バジールによる《若

い女性と牡丹》(1870)の実見を実施し精緻な図像分析を行った。さらに、同研究図書館、研究資料センターにおいて、アーカイブを中心に、受容史、展覧会史、キュレーターによる資料、内部文書など現地でのみ閲覧可能な調査を実施した。同館が所有する出所に関する文書、タイトル変更の承認書類、内部メモおよび書簡、保存報告書、ラベル、プレスリリースを含む全ての関連資料を閲覧できた。加えて、美術史の枠組みにとどまらない人類学的資料や写真による視覚文化的資料についても参照することができたことで、黒人女性表象をめぐる問題をより広い文脈の中で捉える契機となった。同館のアーカイブ担当者、および主要学芸員との関係性も構築することが出来た。今後、必要な資料について日本で入手困難なものについても直接リクエストすればメールにて送付頂けるなどフォロー体制を構築できたことは博士論文にとどまらず今後の研究における重要な基盤となる。

2.3 バッファローにおける調査

バッファロー美術館において、分析対象となるポール・ゴーガンによる《マナオ・トゥパパウ（死霊が見ている）》(1892)の実見を実施し精緻な図像分析を行った。また、出国数か月前から同館の近代美術担当キュレーターと連絡を取ることで、同館が所有する調査メモや資料など、未公開の内部資料も閲覧することが出来た。同作品は当初、分析対象として副次的に考えていたが、今回の調査をきっかけに主要分析作品として捉えなおし考察することにした。作品の収蔵経緯および来歴に関する資料は勿論であるが、所蔵美術館内部における問題意識や変遷について所属キュレーターとの対話や資料から確認できたことは、既存研究（文献、カタログ）では確認することが出来ない補足的かつ有益な情報であった。

3. 今後の展望

今回の現地調査の実施により、コロンビア大学付属図書館および各美術館の研究図書館・アーカイブを訪問し、日本からはアクセス困難な電子資料、展覧会関連資料、未刊行アーカイブ資料を重点的に収集・確認することが出来た他、分析対象の作品実見も全て実施することが出来た。

さらに、本研究の理論的基盤としている Denise Murrell との会談における意見交換や関係構築、各訪問先美術館の主任学芸員との互いの研究に関する意見交換と関係構築の成果は、今後、日本において博士論文に留まらず、その先の研究を邁進する上でも大変重要な基盤となることを確信している。

今後、調査で得た資料は、その成果を本年度の日仏美術学会での口頭発表および、来年度の同学会への論文投稿という形で発表する予定であり、最終的には報告者の博士論文において該当資料とその成果が公表される予定である。

このたびは、国際的に活躍する女性リーダーの育成に関わるプログラムのご支援を賜ることで、このような大変有意義な調査を実施することが出来ました。心より感謝申し上げます。

注

1. Denise M. Murrell, (2018) *Seeing Laure: Race and Modernity from Manet's Olympia to Matisse, Bearden, and Beyond*, PhD diss., Columbia University, 2014, Denise M. Murrell, *Posing Modernity: The Black Model from Manet and Matisse to Today*, New Haven and London, Yale University Press

参考文献

Darcy Grimaldo Grigsby, (2015) Still Thinking about Olympia's Maid, *The Art Bulletin*, vol. 97, no. 4, 430–451.

Denise M. Murrell, (2014) *Seeing Laure: Race and Modernity from Manet's Olympia to Matisse, Bearden, and Beyond*, PhD diss., Columbia University

Denise M. Murrell, (2018) *Posing Modernity: The Black Model from Manet and Matisse to Today*, New Haven and London, Yale University Press

Griselda Pollock, (1999) A Tale of Three Women: Seeing in the Dark, Seeing Double, at Least with Manet, in *Differencing the Canon*, London, Routledge

きむら みゆき／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 比較社会文化学専攻

Investigation of artworks concerning representations of Black women after Édouard Manet's *Olympia*
Miyuki KIMURA

指導教員のコメント

木村美由紀さんは、この度「若手研究者支援」プログラムの助成をいただき、アメリカ合衆国のコロンビア大学附属図書館、ニューヨーク近代美術館、メトロポリタン美術館、バッファロー美術館、ワシントン・ナショナル・ギャラリーにおいて、現地の研究者と意見交換を行うとともに、分析対象とする作品及び資料の網羅的な調査を実施しました。訪問先はいずれも西洋近代美術に関する資料を多数有する研究機関であり、そこでの未刊行資料の調査は、今後の木村さんの研究の実証性と新規性を担保するものです。また、ポストコロニアルな視点から黒人表象研究を牽引するデニス・ミュレルと議論する機会を得たことは、周縁的位置付けにある黒人表象への注目からフランス近代絵画の再検討を試みる木村さんの研究を、当該分野の今日的議論に位置付ける上で極めて重要かつ有意義なものでした。今回の海外調査の成果や今回構築された関係性をもとに、博士論文の執筆に向けた木村さんの今後の研究が、理論的かつ実証的に一層充実したものとなることが期待されます。

お茶の水女子大学期間研究院人文科学系 講師 内山尚子